

FEATURE / 山行記録 × 誌面づくり

「山と溪谷」風の誌面を AIと分業して組む

穂高岳テント泊縦走の記録を、編集部の分業体制でnote記事に仕立てる

「特集1」

岳沢から重太郎新道へ

前穂高―奥穂高岳―涸沢岳―北穂高岳

テント泊縦走記

岳沢から重太郎新道を登り詰め、前穂高岳、奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳へと続く稜線をテント泊で辿る――。穂高連峰の核心部を丸ごと味わう、憧れの縦走路だ。急峻な岩場に息を切らし、稜線に立てば眼下に広がる雲海と大キレットの荒々しい造形に言葉を失う。天候と体力、そして己の技術と向き合いながら歩いた三日間の記録を、ありのままにお届けする。



上高地から穂高岳山荘へ、

重太郎新道の試練

静寂の上高地、テント泊装備と出発

夜明け前の上高地。まだ空気はひんやりと澄み渡り、梓川のせせらぎだけが辺りに響いている。河童橋を渡ると、日帰りの観光客の姿もちらほらと見え始めた。彼らにとっては散策コースの入り口だが、私にとってはここからが本番だ。岳沢小屋までの道のりを「準備運動代わり」と自分に言い聞かせてみるものの、10キロを超えるテント泊装備を背負ったの第一歩は、想像以上に体にこたえた。息は早くも上がり、額には汗がにじむ。まだ先は長い。

重太郎新道、豹変する登山道

岳沢小屋を過ぎ、重太郎新道へと足を踏み入れると、登山道は一変する。それまでの穏やかな樹林帯の道



はどこへやら、梯子や鎖場が次々と現れ、岩肌がむき出しの急登が容赦なく続く。道に迷うことこそないものの、一歩一歩に神経を研ぎ澄まさないといけない緊張感が張り詰めていた。それでも時折足を止めて振り返れば、出発したばかりの上高地の谷、そして乗鞍岳や焼岳が悠然と構える大パノラマが広がり、疲れた体をそっと癒してくれる。この一瞬のご褒美があるからこそ、また前へと足が動く。

紀美子平を経て、前穂高岳へ

紀美子平が近づくにつれ、道の陰しさはさらに増していく。鎖を頼りに、手掛かりとなる岩を一つひとつ確かめながら慎重に登り詰め、ようやく紀美子平に到着した。ここで重いザックをデポし、身軽なアタックザックひとつで最初のピーク・前穂高岳を目指す。荷物から解放された

足取りは驚くほど軽く、まるで羽が生えたかのように、あつという間に山頂へと立つことができた。

白く染まる山頂、名残惜しい下山

期待していたのは、山頂からの大パノラマだった。だが、そんな願いをあざ笑うかのように、突如としてガスが濃くなり、あたりは真っ白に包まれてしまう。せつかくの好展望地であるはずが、視界はわずか数メートル。名残惜しさを感じながらも早々にピークを後にし、前穂高岳から奥穂高岳へと続く、あの美しい吊り尾根へと歩みを進めた。

吊り尾根、湧き上がるガスへの不安

見上げれば、明神岳の鋭い岩峰、そしてこれから向かう奥穂高岳へと連なる稜線が、否応なく気分を高揚させる。岩の上を渡り歩くようなこの吊り尾根こそ、穂高の縦走路の中でも屈指の名場面だと聞いていた。しかし喜びと同時に、小さな不安も胸をよぎる。先ほどまで晴れていた空に、ガスが少しずつ、しかし確実に湧き上がってきていたのだ。稜線に立つ者にとって、天候の変化ほど気になるものはない。今日の目的地である穂高岳山荘まで、この視界がもつてくれることを祈りながら、私は一歩また一歩と、吊り尾根の岩を踏みしめていった。



紀美子平



穂高の稜線に立つ ― 奥穂高岳、絶景と決断の一日 頂に広がる稜線の絶景

標高3,190メートル。奥穂高岳の山頂に立った瞬間、視界いっぱいには広がったのは、明日迎えるはずの北穂高岳へと続く稜線だった。ゴツゴツとした岩稜が空との境界を鋭く切り取り、遠くまで連なるその姿は、まるで大地が意志を持って盛り上がったかのような迫力を放っている。風は冷たく澄み渡り、眼下には雲海がゆったりと流れていた。

大キレット、断念

当初の計画では、この稜線の先―北穂高岳からさらに南岳へと続く「大キレット」に挑む予定だった。日本アルプスの中でも屈指の難所として知られるこの区間は、切り立った痩せ尾根と鎖場が連続し、一瞬の判断ミスも許されない緊張感に満ちている。だが、翌日の天気予報は無情にも雨を告げていた。岩肌が濡れば、足がかりの一つひとつが牙を剥く。自分自身の技術と経験を冷静に見つめ直したとき、答えは自ずと出た。「今の自分には、雨の中での大キレット越えは危険すぎる」。山は逃げない。だからこそ、無理をしてまで挑む理由はない―そう己に言い聞かせ、計画の変更を決断した。

ルート変更という選択

明日は北穂高岳までを目標とし、そこから下山するルートに切り替える。悔しさが無いと言えど嘘になる。だが、この山域で最も過酷な区間に挑むには、万全の状態と晴天という条件が揃わなければならないことを、これまでの経験が教えてくれていた。

名残惜しい稜線の時間

さらに天候は、明日の夕方から本降りの雨になるという。せつかく稜線に立てたというのに、ゆっくりとこの絶景を味わう時間は残されていない。刻一刻と変わりゆく空模様を横目に、名残惜しさを感じながら足早に稜線を後にすることになりそうだ。

また晴れた日に

それでも―今日この瞬間、奥穂高岳の頂から見た北穂への稜線の美しさは、忘れられない一枚の風景として心に刻まれた。大キレットは、また晴れた日に、万全の準備を整えてから挑む。それでいい。山との約束は、焦らず、次への糧とすればいいのだから。





非売品

私の山行記

2026年8月発行 | 山行個人記録 NO.1 | 奥穂高尾編 次回作未定 / 不定期発行
内容の一部に私のYAMAPの記事が使用されています、ご興味ある方はぜひ読んでください。